

富士山噴火の避難

噴火のレベル・エリアによる段階的避難

富士山噴火の避難は、住んでいる地域や噴火の前後によって避難の対象などが異なります。また、避難行動要支援者は、避難開始が早くなります。いざというときのために、日ごろの備えが大切です。



現在、富士山の火山活動が活発化する兆候は見られません。

富士山は活火山

富士山は、この10万年位で形成されました。地球の歴史で見ると若い火山に分類され、新富士火山と言われています。新富士火山は、今から約1万年前から噴火活動が始まり、噴火を繰り返し、現在の外観が形づくられました。

富士山は、1707年（宝永4年）の噴火後、300年以上噴火していません。平成12年10月から平成13年5月にかけて、低周波地震が多く観測され、活火山であることが再認識され、富士山火山の防災対策が検討されました。このとき市富士山火山防災マップ（ハザードマップ）が整備されました。※市公式ウェブサイトからダウンロードできます。

富士山噴火の脅威とは？

富士山の火山現象は、図1のものがあります。この8つの脅威からの避難が必要です。

ピンク色は、火口の位置と深く関係し、黄色は、積雪の時期や降灰が積もった後に発生します。ピンク色、黄色ともに避難の時間的な猶予がありません。緑色は、ほかの現象より生命への危険性が相対的に小さく、避難に時間的な猶予があるものです。このほかにも、爆発時の空気の振動で窓ガラスが割れる空振や火山ガス、水蒸気爆発、岩屑なだれ（山体崩壊）などの現象があります。

図1の火山現象は、小さな噴石を除き市富士山火山防災マップで確認できます。

火山現象はどのような脅威なの？

火砕流／高温の火山灰や岩塊^{がんかい}、火山ガス、空気が一体となって山体を流下する現象です。広範囲の通過域を焼失、埋没させます。速度は時速数十キロから百数十キロと高速です。

大きな噴石／火山弾や岩塊などで、大規模噴火で4km、中小規模噴火で2kmまで飛散し、コンクリートの建物も貫通します。

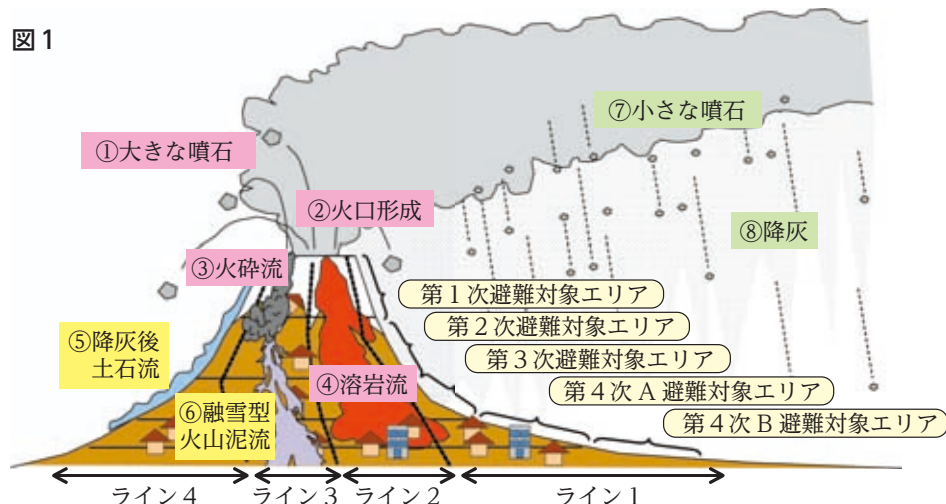
融雪型火山泥流／山腹に積もった雪が火砕流などの熱で一気に溶け、溶けた水が斜面の土砂を取り込んで、

高速（時速60kmを超えることもある）で流下する現象です。

小さな噴石・降灰／農作物に被害を与えます。降灰が30cm以上堆積すると、雨が降ったときに木造家屋が倒壊する可能性があります。

降灰後土石流／降灰や火砕流で流下した火山灰などが山の斜面に堆積した後に起きる土石流です。通常の土石流より弱い雨で発生し、広い範囲に流下するおそれがあります。

図1



⚠ 富士山は、山頂から噴火するとは限りません。

ライン・エリアって何？

富士山が、日本のほかの火山と最も異なる特性は、火口がどこにできるか特定できない点です。避難では、ラインとエリアという考え方を取り入れています。

ラインとは、溶岩などが低いところへ流れる特性を踏まえ、富士山の比較的大きな尾根と尾根の間のことです。図2のように全部で17に区分しています。当市はライン3にあたります。

エリアとは、火山現象と避難の猶予の関係から設定されます。その要図を、図1は側面、図2は平面で表しています。

第1次避難対象エリア／火口の形成が予想される範囲

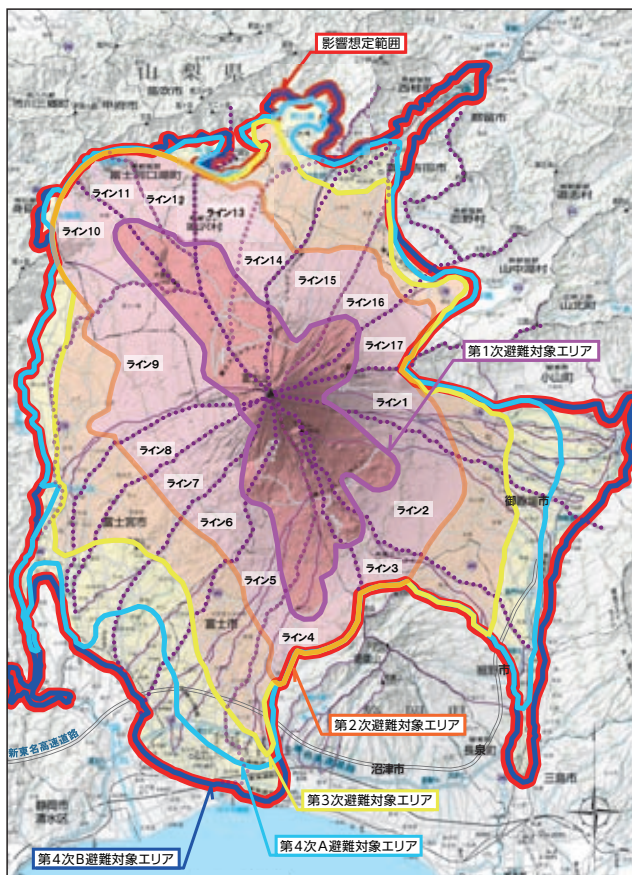
第2次避難対象エリア／火砕流、大きな噴石、溶岩流が3時間以内に到達する範囲

第3次避難対象エリア／溶岩流が3時間から24時間で到達する範囲

第4次A避難対象エリア／溶岩流が24時間から7日間で到達する範囲

第4次B避難対象エリア／溶岩流が7日間から約40日間で到達する範囲

図2



どのように避難するの？

道路の渋滞を防ぐため避難は、1家庭1自家用車が基本です。

また富士山火山は、各種の火山現象と火口位置が噴火まで特定できないとされています。火口が特定されるまでは、全方位にわたる広い範囲の避難を考えます。火口特定後は、対象となるライン内の避難を考えています。避難先は、時期、噴火の規模・状況などに応じて次のようになります。

〈噴火前〉

避難の対象範囲は、ライン1～17の全方位が対象となるので、当市も該当します。(噴火警戒レベルは段階的とは限りません)

噴火警戒レベル3／第1次避難対象エリアは避難準備をします。

噴火警戒レベル4／第1次避難対象エリアは、市内の市指定避難所に避難します。第2次避難対象エリアは、避難準備をします。

噴火警戒レベル5／第1・2次避難対象エリアは、市内の市指定避難所に避難します。第3次避難対象エリアは、避難準備をします。

〈噴火開始直後〉

噴火開始直後は、火口位置や噴火形態、噴火規模をすぐに把握できない場合があります。可能性のある全ての火山現象に対応するため、第3次避難対象エリアまでが避難となり、第4次A避難対象エリアも避難準備をします。

〈噴火開始後〉

火口位置や噴火形態、噴火規模の判断に基づき避難対象範囲を拡大、縮小、解除します。避難範囲を拡大する場合、市内避難者を含め市外へ避難します。ライン3である当市の避難の場合は、東部地区の各市町へ避難します。複数ラインの避難の場合は、県の西部地域へも避難します。

〈各火山現象に応ずる避難〉

融雪型火山泥流／国土交通省のシミュレーション結果で避難エリアを指定します。

降灰／30cm以上は避難します。

小さな噴石／屋内へ避難します。

降灰後土石流／土砂災害警戒区域内は、避難します。